

資料① 阿武隈川のさけ親魚採捕数の推移（福島県）—— 福島県水産課の資料による ——

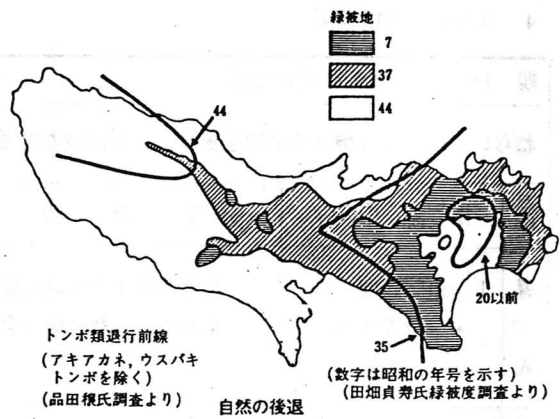
年	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
匹	3,533	1,219	4,535	2,244	1,834	3,057	7,700	2,215	307	9	303	341	142
年	1965	1966	1967	1968	1969	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977
匹	27	145	584	254	50	493	695	114	127	297	317	145	246
年	1978	1979	1980										
匹	102	219	697										

資料② ひろがる東京砂漠

生物後退曲線(ホテル・東京都の場合)



図中の数字は西暦年をあらわす。東京の自然史研究会「失われた東京の自然・中間報告」(『経済』1973年8月号)



資料③ 国土開発と自然保護

現在、日本では、山野の樹木がかたっぱしから乱伐され、山という山がつつぎつつぎと丸坊主にされてゆく。自然の緑が失われるだけでなく、水害や土砂くずれの被害が副次的におそってくる。そういう問題がでているわけだけれども、これなどもとをただせば、日本人の植物にたいする過度の信頼感が原因だと考えられる。つまり、山野の樹木などというものは、人間の必要なだけいくらでも切って使えば、あとはひとりでに生えてきて、いくらでも補いがつくという認識があったからである。事実、日本人が斧とのこぎりで木を切っていたあいだは、たしかにその通りであった。植物の天然の補給は可能だったのである。ところが、近年になって、欧米から大型の開発機械がどっと輸入された。それらのトラクターやブルドーザーなど、いずれも欧米で発明され、実用化されてきたものである。だが欧米ではそれらの機械をつかう反面で、かならず切っただけの分に相当する補償作業をいっぼうでおこなってきた。

ところが、日本はその補償作業を学ばず、機械のみを輸入して、従来の斧やのこぎりの時代とおなじ